

## フィリピン・エクスポージャー・プログラム 実習レポート ～バコロド市～

2016/10/05

国際学部 4 年 M. I.

### はじめに

私は国際平和研究所主催『フィリピン・エクスポージャー・プログラム』に参加し、フィリピン・ネグロス島を訪れた。このプログラムは 2016 年 3 月に 2 週間かけて行われ、私はネグロス島の農村地域に滞在していた。私は農村地域において主に自身の土地を持たない農業労働者、いわゆる小作人を対象にインタビューを行い、収入や支出、仕事の内容や教育や健康に関する問題など、彼らの生活の実態を調査した。本稿では、私が 3 日間滞在したハンドゥマナン村とマンバヒン村で行ったインタビューをまとめていきながら、小作人の生活の中にある暴力や、どのようにその暴力に対抗しているのかなどについて考察していく。

ハンドゥマナン村とマンバヒン村のある西ネグロス州の州都バコロド市では、多くのバイクや車、トライシクルと呼ばれるバイクの後ろや横に座席のついた乗り物などが絶え間なく道路を走っており、またバコロド空港から同市内のホテルまでの道中にはマクドナルドなどのファストフード店や大学、建設途中のショッピングモールなどが立ち並んでいた。

### バコロド市・ハンドゥマナン村

J さん(47 歳・女性)

J さんは、夫と 8 人の子供、また義理の母の計 11 人で暮らしている。彼女自身は主婦であり、毎日家事と子供の世話をし、また教会で無給の手伝いをしている。夫はエンバルマーとして働いており、不定休である。エンバルマーの仕事は日本の葬儀社の役割に相当するが、日本とは異なり、フィリピンのそれは国家資格であり、また遺体の防腐処置や解剖にも携わる。夫の所得は月約 9,000 ペソ(日本円:20,422、2016 年 5 月時点)だが、8 人の子供を養うには毎日 500 ペソほど必要だという。夫の所得がなくなってしまうと雇用主から給料を前借りしたり、近所の人から借金をしたりしてしのいでいる。J さんの長女はすでに結婚しており、現在は妊娠している。長男と次男は経済的な問題で高校を中退し、現在では職を探している状況であった。子供が学校に行かれなくなるのは、この家族だけではない。多くの人々にインタビューを行ったが、ほとんどが“financial problem”を口にしており、それを理由に子供たちが学校に通えなくなったり、高校を卒業して働いたりすることを強いられていた。また J さんたちは政府の支援を受けていなかった。

D さん(45 歳・女性)

Dさんは6人の子供を持ち、そのうち2人の息子は自宅から離れた場所で働いており、週末だけ帰宅している。彼女は、夫を病気で亡くしたあと小作人として、週に6日、朝と夜のそれぞれ4時間働いている。日曜日は唯一の休日で、彼女は教会へ通っているという。彼女の一カ月の収入は2,000ペソ（日本円:4,290円 2016年5月時点）で、その他に息子の収入もあるが、その額を聞くことはできなかった。大学生の長女は、政府の支援である4Psを利用して、バコロド市内にある大学へ通っていた。貧困層への支援の一つである4Psとは、Pantawid Pamilyang Pilipino Programの略で、就学している子どもがいる家庭に毎月約300ペソの健康手当と500ペソの就学手当を支給する制度である。4Psの受益者に選ばれた世帯は、2カ月に1度銀行に出向き支給額を引き出す。それは、子供たちが学校へ通い続けられるように、交通費や大学の入学金として活用されている。

#### Aさん(47・女性)

Aさんは5人の子供と暮らしている。彼女は、結婚する前ショッピングモールで働いていたが、結婚を機に退職し、現在は家事と育児に専念している。子供たちはそれぞれ小学校や高校に通っており、また夫は警備員として離れた場所で暮らしている。夫に休みは少なく、帰宅できるのはクリスマスと正月のみである。彼女は子供たちを全員学校へ通わせ続けられるか心配していた。夫の収入は月約3,450ペソ（日本円:7,828円 2016年5月時点）だが、食費や通学に必要な交通費などを支払うのがやつの状態であった。Aさんは借金について言及していなかったが、生活は常にぎりぎりで、病気になったときに薬を購入する余裕はないという。

#### Bさん(54歳・女性)

Bさんは夫と4人の子供と暮らしている。彼女と夫は小作人であったが、夫は高血圧のために仕事を続けることが難しくなり、Bさんも仕事を中断し夫の看病をしている。3人の息子はすでに実家を出て働いており、今はその息子たちからの送金で生活しているという。長男は経済的問題から高校を中退し、現在、仕事を探している。

世帯の一ヶ月の収入は、働いている息子たちから送金される約5,000ペソ（日本円:11,346円）のみである。Bさんは、収入を増やすために、豚や鳥の畜産をはじめたが、6人家族が生活するにはあまりに不十分な収入しか得られない。食費以外にも、夫の治療費が大きな負担となっているのである。夫は公立病院へ通っているため診察は無料だが、通院に必要な交通費や、薬代を支払う必要がある。高額な薬を購入することは困難なので、可能な範囲で薬を購入している。彼女に今何をしたいかと尋ねると、家が狭いので家を大きくしたい、また自分も再び仕事をしたいと話していた。

#### Cさん(52歳・女性)

Cさんは夫と5人の子供と暮らしている。2人の息子は家を出て働いており、1人の娘は

ホテルスタッフとしてマニラに住んでいる。また 2 人の娘もすでに結婚してそれぞれの家庭を持っている。Cさんは、以前は小作人だったが今は専業主婦として家事、育児をしている。夫はトラシクルのドライバーとして毎日朝から晩まで働いているものの、安定した収入を得ることはできない。そのうえ、毎日強い日差しの中での重労働のために、夫はしばしば体調を崩してしまうという。Cさんの家族も政府から 4Ps の支援を受けており、それは主に教育費として活用されていた。しかし、貧困層の全ての家庭が 4Ps の受益者になれるわけではない。4Ps に申請しても、政府は全ての家庭を援助することができず、それに選ばれる家庭と選ばれない家庭があるのが現状である。そのため、4Ps の受給をまつ近隣者から、妬まれたりすることがあると話していた。インタビューによると、4Ps の受益者に選ばれる者たちは、審査に携わる自治体や政府関係機関の職員などつながりのある者が多く、より支援を必要としている人びとにはそのチャンスがめぐってこないという。インタビューを行う中で、4Ps の受益者、非受益者、受給を待っている人といった立場の異なる人々に会ったが、4Ps 受給の要件を把握している人はいなかった。

#### Mさん(22・女性)

最後に、ハンドゥマナン村では、ホストファミリーである M さんに話を伺った。M さんは、今年、大学を卒業予定で教員の資格も持っているが、肝心の就職先がまだ見つからない。彼女の両親は共働きで、母親は毎日朝 6 時には家を出ていく。母親が帰宅するのは夜なので、彼女は料理、洗濯などの家事のほとんどをこなしている。彼女の父親は遠く離れたリゾート施設に勤めており、帰ってくるのは月に 1 度か 2 度ほどである。M さんは両親の収入を正確に知ってはいなかったが、父親の収入は月に 10,000 ペソ(日本円:22,691 円 2016 年 5 月時点)くらいだろうと話していた。正確な数字ではないが、これは私がインタビューしてきた中で一番の高額である。また M さんには、2 人の姉と 1 人の兄がおり、現在 2 人の姉は結婚し家を出ている。M さんによれば彼女の兄は自閉症であり、仕事をしたり自立して生活したりすることが困難である。兄の自閉症は比較的に軽度な方で、彼は一人で食事、トイレ、風呂に行くことはできていた。また彼は家族に限って会話することが可能であり、家族以外と会話することができないものの、こちらが言ったことは理解していた。障害の関係で、現在彼は学校には行っておらず、家に誰もいない日は一人でテレビを見て過ごしている。彼に対する政府からの援助は一切ない。今では彼女は大学を卒業することはできるが、過去に一度大学を通えなくなるかもしれないほどの経済難に陥ったことがあるそうだ。彼女は、その時は 1 日 3 食食べることも難しく、毎日米しか食べられなかったと話していた。

#### バゴ市・タブナン村・マンバヒン

ハンドゥマナンからトラシカルに乗って 1 時間もしない距離に、タブナン村マンバヒンがある。そこに住む人々のほとんどが、サトウキビ大農場で農場労働者として働いてお

り、彼らの生活は食生活、労働時間においてハンドゥマナン村に住む人々以上に深刻だった。そこでは農地改革が上手く機能しないまま、長年地主と対立している一方で、地主に依存して毎日をなんとか生きている人々が炎天下の中必死にサトウキビを収穫する人々にインタビューを行った。

#### A さん(35 歳・女性)

A さんは 2 人の子供を持つ母親で、夫と 4 人で暮らしている。夫婦で農場労働者としてサトウキビ大農場で働いている。子供たちはそれぞれ小学校と高校に通っているが、家から高校は約 6km の距離があり、片道 5 ペソの交通費がかかる。小学校は公立だが、1 年で 50 ペソ(日本円:113 円)の授業料を払わなければならない。それに加えて制服などを揃えなければならない、また学校で昼食を食べるため、お弁当を持たせている。A さんによると、経済的問題から退学してしまう生徒が少なくない。また最近では、学校で携帯電話をめぐりいじめがあるという。現在フィリピンでは、携帯電話やスマートフォンが普及しており、生徒たちも携帯電話を持ち歩くようになった。生徒たちは携帯電話に夢中になり勉強がおろそかになってしまっている。またメールやツイッターなどの SNS(Social Networking Service)をめぐってのトラブルも増えているらしく、こういった問題は日本の学校と類似している点だと感じた。

彼女自身の収入は週に 500 ペソ(日本円:1,135 円)、また夫は週に 700 ペソ(日本円:1,588 円)である。しかしこれは収穫期に限るもので、収穫が済むと収入は減ってしまい、最悪の場合は収入がない月もあるという。その間彼らは工事現場で働いたり、雑草取りをしたりして少ない収入を得ている。彼女たちは基本的に毎日働いており、収穫は全て人の手で行っている。3 月から 9 月は収穫期ではないため、田植えや雑草取りをして稼いでいる。彼女の生活は極めて質素で、お金のない時期は全てを減らして生活しており、借金も怖くてあまりできないと言っていた。

#### B さん(50 歳・女性)

彼女は 7 人の子供と夫を持つサトウキビ大農場の労働者である。子供たちはそれぞれ大学へ通っていたり、両親の仕事を手伝っていたり、また家を出て働いている。1 人は小学校へ通っており、先に述べたように毎年 50 ペソの授業料や制服、教科書代を支払っている。彼女の収入は週に 500 ペソ、夫の収入は 700 ペソである。しかし収入は低く、不十分である。彼女たちは自身の土地は持っておらず、地主の土地を借りて家を建て農業をしている。マンバヒンでは、約 50 世帯のうち 4Ps に加入しているのは 11 世帯である。彼女は 4Ps に加入しているが、実際に現金をもらえるのは 2 カ月に 1 度、それも銀行へ出向き 1,600 ペソ(日本円:3,631 円)を口座から引き出さなければならない。彼女たちにとって村を出て銀行まで行く交通費はとても大きなもので、実際に交通費を支払うことができない人々は 4Ps の申請すらできない。

R さん(33 歳・男性)

彼は小作人として働いており、またマンバヒンの農民組合のリーダーである。彼は 3 人の子供と、妻と共に暮らしている。妻は仕事をしておらず、主婦として家事と育児をしている。子供たちは皆村の近くの小学校へ通っており、彼は学校へ行くことが子供たちにとっての最優先だと考えている。彼が基本的に月曜日から土曜日まで働く。収入は週に 1,000 ペソ(日本円:2,269 円)と、村でインタビューした人々の中では一番収入が高かった。また彼は家畜を飼っており、それは貯金の代わりであると言っていた。例えば家族が怪我や病気になったときなど万が一のときに、家畜を売って現金にする。以前娘が木から落ちて大怪我をしてしまった際には実際にカラバオを売って、娘の入院費の足しにしていた。また彼らは薬を買う経済的余裕を持たない。公立病院では基本的に診察は無料だが、薬代はかかる。そのため彼らは道に生えている薬草を摘んでは薬替わりに利用しているのだ。彼らは子供が生まれるときでさえ病院へ行かない。彼の妻は 3 人の子供全てを自宅で出産した。彼らにとって病院へ行くということは、それほどにあり得ない話なのである。

彼の話によると、この村では 5 年ほど前から地主と対立している。農地改革にそぐわない悪条件の中で働かされ、農民の怒りや不満は限界にきている。最近では NGO が介入、彼らに代わって行政に 3 回の調査を行い、農地改革は未だなされていないことについて NGO を介して政府に訴えているが、地主はそれを認めない。彼らは裁判を考えたが、自分たちが勝つための資料をまだ集められていない。マンバヒンのサトウキビ農場の労働者たちと地主の対立は難航している。

#### 5step にそって ～1 暴力 2 自力更生 3 阻害要因 4 連帯～

ここからは、インタビューに協力してくれた人々が直面している問題をエクスポージャーの 5 段階アプローチを用いて考察する。

まず暴力について、彼らは低い賃金で働いており、常に上司や地主に前借や借金をしている。しかしこれは上司や地主から受けている暴力ではなく、低賃金という事実が社会の中に定着しており、これは構造的暴力に分類される。私たちから見える構造的暴力は、彼らにはあまり見えていない。給料が低く毎日の生活は苦しいことを理解しているのに「貧しいが家族がいれば幸せだ」と口にする。彼らは貧しさの中で家族の絆を強めるが、決してそれは貧しさから抜け出しているわけではない。

一方で、マンバヒンでは直接的暴力が見て取れた。マンバヒンのサトウキビ農場の労働者たちは、NGO の協力を得て地主と交渉し自分たちの土地を得ようと 5 年間も奮闘している。しかし地主は未だ交渉に応じず、政府農地改革省に訴えているものの相手にしてもらえない。これは、彼らが地主や政府側から受けている直接的暴力だといえるだろう。

どのように暴力に対抗しているかという点、生活が苦しいときに近所の人と食糧を分け合ったり、金の貸し借りをしたりして助け合っている。また先に述べたようにマンバヒンのサトウキビ農場労働者たちは地主と対立し、自分たちの土地を得ようとしている。また、

彼らは収入の低さから怪我や病気になっても病院に行くことができないが、薬草を摘んで薬として使っており、どうしても病院へ行かなければならない場合は家畜を売って現金収入を得ている。

マンバヒンの小作人たちは地主と対立している一方で地主に借金をしなければ生活できない。これは彼らの自力更生努力を阻害している要因になっている。彼らは、農閑期にはほとんど収入がなく、その間地主からの借金によって生活している。

インタビューしたおよそ半数の家庭が 4Ps という国の援助を得ていた。4Ps とは「貧困家庭向け条件付き現金給付プログラム」のことで、学校に通っている子供を持つ 1 家庭に毎月 300 ペソの健康手当と 500 ペソの就学手当が給付される。しかし給付といっても、彼らは 2 カ月に 1 度銀行へ行き、その際にミーティングに参加しなければならない。毎日働いている彼らにとって、時間と交通費を費やすことは簡単ではない。またマンバヒンでは、地主との交渉に RDO という NGO が介入している。

ここまで、彼らが直接的・構造的に受けている暴力やそれに対する自力更生努力、その阻害要因などを述べてきたが、最後に彼らと私たちの関係性と関与について、考えてみる。

#### おわりに ～5 関係関与～

本稿のまとめとして、最後に私とインタビューに応じてくれた人々との関係性について考察する。

私は今まで、フィリピンやネグロス島の貧困の実態を知ろうとしなかった。もしこのプログラムに参加していなかったら、今もネグロス島について知ろうとも思わなかっただろう。私はこのプログラムに参加するまで、ネグロス島の人々と関係性を持っていなかったのである。私はプログラムに参加して、厳しい労働状況や少ない賃金が原因で苦しい生活を送りなかなか貧困から抜け出せない小作人の存在や、彼らの抱える諸問題の背景にあるフィリピンがスペインに植民地支配されていた時代から続く大土地所有制、政府の援助の不完全さなど、多くのことを知った。そしてそれは解決策を簡単に導き出すことのできない問題であることも感じた。サトウキビの収穫体験、村でのホームステイや村人へのインタビューなどの経験は単なる海外旅行などでは絶対にできないこと、そして何冊もの参考文献で得た知識よりもとても貴重なものであると実感することができた。またこのプログラムでは、多くの現地スタッフ、学生に協力してもらって成り立っていた。それは私たち日本の学生に協力してくれたネグロス島の人々の、「この島の問題を知ってもらいたい」という思いであり、私は現地の人々の現状や問題を解決させようとしている自力更生も自身の目で見、感じるすることができた。さまざまな問題やネグロス島の人々の必死の訴えを知った今、私は更なるステップとしてネグロス島の人々と共にこの現状を周囲に発信していくことができる。それがこのプログラムで築き上げた私とネグロス島の人々との新たな関係性であり、発信し続けることでこの関係性はこれからも続いていく。私の些細な行動は、決して彼らの抱える問題の直接的な問題の解決にはならないかもしれない。しかし、私が

ネグロス島について周囲に発信することは、今の私がこのプログラムによって得た知識や感性を最大限に活かす方法である。更なる展望として、私はネグロス島について研究を続けることでより多くの知識を身につけ、そしてそれを周囲に発信し、今までネグロス島について知らなかった多くの人に関心を持ってもらえるように努めていきたい。